

活きた土が生命を育む！

～近江園田ふぁーむのフードリサイクルエコ農法～

「地主さんから預かった田んぼを、やせた状態で返すことはできない」

25年以上前から変わらないこの想いが、近江園田ふぁーむの土づくりの原動力です。

○試行錯誤の末にたどり着いた「資源循環」

はじめは、採卵鶏の堆肥を利用していました。

しかし、抗生物質の残留が取りざたされたことを契機に、「生ごみ堆肥」の活用へと転換しました。

・企業の社員食堂から出る「生ごみ」の活用

栄養管理が徹底された企業の社員食堂等から出る生ごみは、残留農薬のリスクが低く、良質な肥料原料となります。

取組当初は、異物（割れた食器や割りばし等）の混入・除去に苦勞しましたが、企業の協力もあり、改善していききました。



(協力：NPO 法人日本食品リサイクルネットワーク 関西支部 吉田 栄治 氏)

・独自の「熟成プロセス」

企業から有価で引き取った生ごみ堆肥を、自社内で二次処理。米ぬかや糖蜜と混合・調整することで、土づくりに適した堆肥へと熟成させています。また、この糖蜜は、地元企業と提携し不要となったものを活用しています。

はじめは生ごみ堆肥を利用した経験がなく、鳥害など苦勞がありましたが、元東京農業大学の後藤教授の指導を受け、改善していききました。

・資源循環

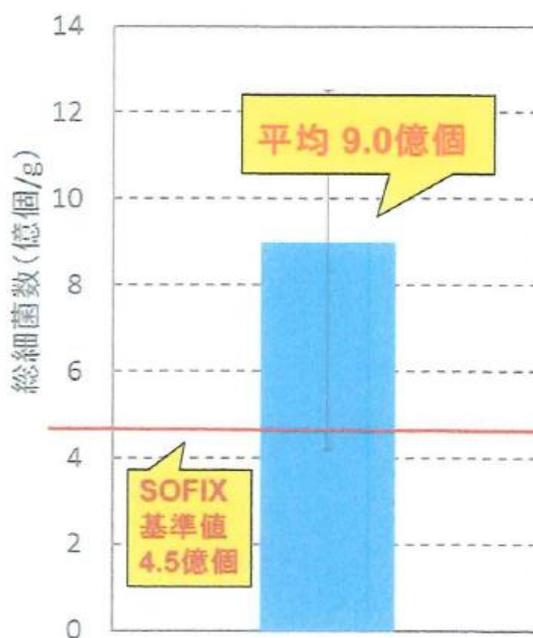
出来た農産物を企業の社員食堂等に納入して利用してもらい、そこから出た生ごみをまた堆肥化して農地に戻すことで、食料資源の循環を目指しています。

○活きた土の証明

近江園田ふぁーむの田んぼの土が「活きた土」であることは、科学的にも証明されています。

立命館大学がSOFIX（土壌肥沃度指数）による調査を行った結果、一般的なほ場では1～2億個/g、良い土壌の基準となる値が4.5億個/gとされるなかで、近江園田ふぁーむのほ場では平均9億個/g、最大で24億個/gという数値を記録しました。

この豊かな土壌が、農薬や化学肥料に頼らずとも、1つ上の満足を届けられる農作物を育てています。



※2016年1月に分析した4サンプルの分析結果による

○今後について（本人のコメント）

日本は食料自給率が低いにもかかわらず、多くの食品ロスが発生している。食べられなくなったものは、ごみとして処分され、無駄になっている。

また、日本は化学肥料もその多くを輸入に頼っている。鉱石を掘るのも、海を越えて輸送するのも、CO2を排出する。

こんな無駄なことはないと思う。

生ごみ堆肥が広がれば、こうした無駄も減るのではないだろうか。

環境を守るためにも、生ごみ堆肥の取組を広げていきたい。

(株)近江園田ふぁーむの紹介



会長 園田 耕一 氏

株式会社 近江園田ふぁーむ

所在地：近江八幡市野村町

TEL : 0748-36-8586

経歴

2004年：食品ロス・廃棄物堆肥の栽培テスト開始

2015年：フードリサイクルエコ農法（立命館大学と連携スタート）

2017年：平成28年度環境保全型農業推進コンクール 会長賞受賞

2019年：気候変動による農業技術国際シンポジウムにて講演

この記事に関するお問合せ先

近江八幡市産業経済部農業振興課

TEL: 0748-36-5576